
遊戯王GX～象徴を操る者～

エギル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX〈象徴を操る者〉

【Nコード】

N1609Y

【作者名】

エギル

【あらすじ】

デュエルアカデミアの試験に遅れて来た双子の兄妹、遊城十代と遊城刹那。彼らの物語が始まる…。不定期更新になりますが、よろしく願います。

第一話 双子と精霊

晴天の下、二人の少年少女が街中を全力疾走していた。

今日は、デュエルアカデミア入学試験の実技試験の日。当然ながら二人とも試験に間に合うように電車に乗ったのだが…

「遅れる遅れる遅れる！」

現在、すでに受付どころか試験の開始時間さえも過ぎていた。

「こんな日に電車が遅れるなんて！いやエキサイティング！これは俺達に与えられた試験なんだ！」

「十代、叫ぶ暇があるなら走ろうよ」

「なんだよ刹那！今だって走ってるだろ！ていうか、叫ばずにはいられねーだろ！」

少年、十代は叫びながら走っていると並走していた少女、刹那に注意されてしまい少し不機嫌そうな顔で刹那を見る。

【でも、急がないと不味いんだろう、十代。刹那の言うように走るのに専念した方がいいんじゃないかい？】

【……………】（コクッ）

二人が走っていると、十代の精霊のユベルと刹那の精霊、魔法の操マジカル・マリオネットり人形のオドが話しかけてきた。

オドは一言も話さないがこの場にいる者達は当然のように理解でき

るのでコミュニケーションには問題ない。

「！十代、前」

刹那を見ていて前方不注意になっている十代の前に人が立っていた。刹那の言葉で前を見た十代は止まろうとしたが、全力疾走していたのですぐに止まることはできなかった。

「うわっ！」

相手にぶつかってしまったが、十代が必死にブレーキをかけていたおかげで相手は倒れずに済み、十代は後ろに倒れ、カードが辺りに散らばった。

「すみません、大丈夫ですか？」

「ごめん」

二人はぶつかった相手に謝るが、どこかで見たような姿に思わず相手を凝視してしまう。ユベル達も驚いているようだ。

「君達、デュエルをやるのかい？」

ぶつかった相手が話しかけてくる。

「はい、これからデュエルアカデミアの受験に行くんです」

刹那が答えると、彼はデッキホルダーから一枚のカードを取り出した。

「ラッキーカードだ。こいつが君の所に行きたがっている」

彼はそのカードを十代に手渡した。

「えっ。ありがとうございます！」

「がんばれよ」

そう言うと、彼は歩いて行ってしまった。彼から渡されたカードはハネクリボーだった。

【クリクリー】

【へえ、良かったじゃないか十代。あの人に精霊のカードをもらえるなんて】

「十代、時間」

十代は驚きと感動で少しぼーっとしていたが刹那の言葉で我に返り、二人は試験会場に向かって再び走り出した。

第一話 双子と精霊（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。

第二話 実技試験 VS 十代（前書き）

第二話修正完了しました。

第二話 実技試験 VS 十代

十代 side

何とかぎりぎりですべて受付に滑り込んだ俺達が試験会場に入ると、一人の受験生が破壊輪で試験官のライフを0にした。

「スツゲエな、あいつ」

「当たり前だよ。受験番号1番、筆記試験のトップなんだから」

俺の言葉に、隣にいた気弱な雰囲気メガネの男子が答えた。受験番号ってそういう意味だったのかと感心していると隣にいた刹那にジト目で見られた。

【十代、それちゃんと試験要項に書いてたよ】

ユベルのため息を聞き流しているとすぐ近くにさっきの受験番号1番がやってきた。少し挨拶に行くか。

「さっきのデュエル凄かったな。今年の受験生じゃ、お前は2番目に強いかもな」

受験番号1番がどうして自分が1番じゃないのかと聞き返したから、俺は刹那の肩を組んで笑いながら答えた。

「1番は俺達だからさー!」

「十代、その考えだとこの人は3番だよ」

「細かいことはいいんだよ」

『受験番号11番、遊城十代君、デュエルステージへどうぞ』

刹那達と話をしていると放送で呼ばれた。

「おっ、行ってくるぜ」

「十代、頑張って」

【こんなところで負けるんじゃないよ】

【クリクリー】

【……………】（ぐっ）

「おっっ！」

皆の声援に応え、ステージに向かった。俺の相手は誰だ？

十代 side out

刹那 side

十代の相手は実技最高責任者らしい。さてと、ここから応援しますか。

「ねえ、さつきから気になってたんすけど。もしかして親戚なんすか？」

デュエルが始まるのを待っているとさつきのメガネ君が質問してきた。

「よくわかったね。いや、当然か。私達は双子だよ」

「やっぱりっすか。でも双子でも性格は全然違っんすね」

私達の見た目はそっくりで、周りの人に髪を伸ばすよう頼まれるほど見分けがつかない。現在はセミロングだ。本当は十代と同じ髪形にしたいのだが…。

そして、彼の言う通り私達の性格は表面上は真逆だが、ユベル曰く、私にも十代のようなところがあるらしい。よくは分からないが。

「君、彼は強いのか？」

受験番号1番が振り向いて聞いてきた。

「まあね、もうすぐ始まるみたいだ。見ていればわかるよ」

刹那 side out

十代 side

「この由緒正しきデュエルアカデミアの試験に遅れるなど言語道断！ドロッパアウトボーイ達はワタクシが相手をするノーネ」

「受験番号11番、遊城十代です。よろしく願いします」

この特徴的な喋り方が俺の相手か……。どんなデュエルになるかわくわくしてきたぜ。

「デュエル！」

クロノスLP4000

十代LP4000

「ワタクシのターン、ドロ」

お、笑っているな。いいカードが来たみたいだ。どんなモンスターが来るんだ？

「ワタクシはカードを2枚伏せ、手札から《大嵐》を発動ナノーネ。フィールド上の魔法・罫を全て破壊するノーネ」

フィールド上に強風が吹き荒れ、カードを破壊した。先生のカードも巻き込まれてるぜ？何が来るんだ？

「ワタクシは破壊された《黄金の邪神像》の効果により《邪神トークン》を2体召カイン。そして《邪神トークン》を生け贄に《古代アンティの機械巨人》を召喚するノーネ」

古代の機械巨人 ATK3000

破壊された罫カードから金色のトークンが出てきたと思ったら、すぐに巨大な機械のモンスターが出現した。

「すげえ！すげえ！1ターン目から最上級モンスターを出すなんて、本当にすげえ！」

【さすが、実技最高責任者なだけはあるね。でも、あのモンスターは十代の敵じゃないね】

ユベルが俺の手札を覗き込み、笑いながら言った。確かにこれくらいの攻撃力なら対処できる。刹那が出すモンスターは時々化け物になるからなあ…

「褒めても何も出ないノーネ。ターンエンドなノーネ」

クロノスLP4000

手札：2枚

モンスター：古代の機械巨人

魔法、罠：なし

いけねっ、ちょっと集中が切れてた。今はこのデュエルを楽しもう！周りが何か言ってるけど気にしない。

「俺のターン、ドロ。俺は《E・HEROエアーマン》を召喚」

エアーマン ATK1800

「《エアーマン》の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、2つの効果を選んで発動する。俺は《デッキからHEROと名のつくモンスター1体を手札に加える》の効果を発動。俺は《E・HEROバーストレディ》を手札に加える」

これで切り札が揃った。

「俺は手札の《E・HEROフェザーマン》と《E・HEROバーストレディ》を融合！来い《E・HEROフレイム・ウィングマン》
《！》」

フレイム・ウィングマン ATK2100

俺のフィールドに白い翼と竜の頭の腕を持ったHEROが現れた。

「いくらモンスターを並べても、《古代の機械巨人》には敵わないノーネ」

「まだまだ行くぜ！さらにフィールド魔法《摩天楼 スカイスクレーパー》を発動！」

フィールド上に高層ビル群がそびえ立ち、フレイム・ウィングマンが中央のビルの頂上に佇み、エアーマンはその近くを滞空している。そして手札に来てもらって悪いがハネクリボー、今回はお前の出番はなさそうだ。

【ク、クリイ〜】

【落ち込むんじゃないよ。君は僕と違ってそのまま場に出られるじゃないか】

…ユベル、目が笑ってないぞ。チャンスがあれば出してやるから。

「な、なんなノーネ!？」

「ここがHERO達の戦いの舞台だ！このカードは《E・HERO》
《と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が
相手モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃力が1000ポイント
トアップする。《フレイム・ウィングマン》で《古代の機械巨人》
を攻撃！スカイスクレーパーシユート！」

フレイム・ウィングマン ATK2100 3100

《フレイム・ウィングマン》が全身に炎を纏いながら《古代の機械
巨人》攻撃して破壊した。

クロノスLP4000 3900

「マンマミーア！」

「そして《フレイム・ウィングマン》の効果発動。モンスターを戦
闘で破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライ
フに与える」

破壊された《古代の機械巨人》が倒れ、先生を下敷きにした。

クロノスLP3900 900

「《エアーマン》で直接攻撃だ！」

クロノスLP900 0

「ガツチャ。楽しいデュエルだったぜ、先生」

先生がものすごく悔しがっている。すると、同じデュエルステージ

で刹那の試験を行うと放送が入った。

次は刹那の番か。あいつが負けるとは思わないけど、応援するぜ！

十代 side out

第二話 実技試験 VS 十代（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。

第三話 実技試験 VS 刹那

刹那 side

『受験番号8番、遊城刹那さん、デュエルステージへどうぞ』

十代のデュエルが終わるとすぐに放送が入った。
もう少し余韻に浸っていたかったのに…

「次は刹那の番だな、頑張れよ！」

「もちろん。負けるつもりはないよ」

ステージに向かう途中で十代とすれ違いざまに拳をにぎり、応援にこたえる。

ステージにつくと十代とデュエルした相手が再び構えていた。十代と同じ人が相手か。

「さっきのはまぐれなノーネ。ここで汚名返上させてもらおうノーネ」

十代に負けたことがショックだったらしい。だが、私も負けるわけにはいかない。

「デュエル!!」「デュエル」

刹那LP4000

クロノスLP4000

「先行はシニョーラに譲るノーネ」

「ではいきます。私のターン、ドロウ。私は魔法カード《スライム増殖炉》を発動。そして、カードを1枚伏せてターンエンド」

刹那LP4000

手札：4枚

モンスター：なし

魔法、罫：スライム増殖炉、1枚

何だあいつ、手札事故でも起こしたのか？

よりによってこんな時に。

あの子、運がないわね。

外野がうるさいが無視だ。私のモンスターは一気に化ける。

「フン、さっきのドロップアウトボーイと違ってシニョーラは運がないノーネ。ワタシのターン、ドロウ！」

先生はドロウしたカードを見るとニヤリと笑った。

「ワタシは《トロイホース》を召カーン」

トロイホースATK1600

「私は罫カード《威嚇する咆哮》を発動。このターン、相手は攻撃宣言することはできない」

「そんなことしても無駄なノーネ。手札からデュアルサモン《二重召喚》を発動。

このターンワタシはもう一度モンスターを召喚できるノーネ。さらに《トロイホース》の効果発動！地属性モンスターを召喚する時2

体分の生け贄にすることが出来るノーネ。ワタシは《トロイホース》を生け贄に《古代の機械巨人》を召カイン。カードを1枚伏せてターンエンドなノーネ」

古代の機械巨人 ATK3000

クロノスLP4000

手札：2枚

モンスター：古代の機械巨人

魔法、罫：1枚

周りの声が一段と大きくなった。まあ、知らない人から見ると絶望的に思えるだろうね。しかし、また1ターン目から《古代の機械巨人》を出すとは。

だけど、もう私の手札には勝利の条件はほとんど揃っている。残るは止めの一押しだけだ。思わず笑みがこぼれる。

「刹那！行けー！」

【これは決まりかな？】

【……】

【……クリ？】

余談だが、私の表情はほとんど変わらないらしく十代とユベル、オドにしか読み取れないそうだ。新入りのハネクリボーが混乱している。

「サレンダーするなら今のうちなノーネ」

「サレンダーはしませんよ。私のターン、ドロー」

…来た。

「《スライム増殖炉》の効果で《スライムトークン》を特殊召喚する」

スライムトークン ATK500

「私は《スライムトークン》に《下剋上の首飾り》《団結の力》《ジャンク・アタック》を装備。《団結の力》は自分フィールド上の表側表示モンスター1体につき装備モンスターの攻撃力・守備力を800ポイントアップする。そして、手札から魔法カード《テラ・フォーミング》を発動。デッキからフィールド魔法カードを1枚手札に加える。さらに、フィールド魔法《湿地草原》を発動。このカードはレベル2以下の水族かつ水属性モンスターの攻撃力を1200ポイントアップする」

スライムトークン ATK500 1300 2500

「いくら装備カードを重ねても、ワタシの《古代の機械巨人》には届かないノーネ（それに伏せカードは《ミラーフォース》なノーネ）」

「私は《サイクロン》を発動。先生の伏せカードを破壊します」

フィールドに風が吹き荒れ、先生のカードを破壊した。《ミラーフォース》だったか…

【……】（刹那、一言いいか？）

（…手短に頼むよ、オド）

【……】（そんな装備で大丈夫か）

（十分だと思うけど。それにもう私の手札は無いし何もできないよ）

質問に答えるとオドはフィールドの隅でいじけはじめた。何なんだ
一体。

「…私は《スライムトークン》で《古代の機械巨人》を攻撃」

「攻撃力は《古代の機械巨人》方が上なノーネ。そんなトークンご
とき、返り討ちにしてやるノーネ」

「《下剋上の首飾り》の効果発動。装備モンスターが戦闘を行う時、
相手モンスターのレベル・自分のレベルの数値×500ポイント攻
撃力をアップする。《古代の機械巨人》のレベルは8、《スライム
トークン》のレベルは1、よって3500ポイントアップする」

スライムトークン ATK 2500 6000

「攻撃力6000でスート!？」

スライムトークンが古代の機械巨人に向かって飛んで行き、古代の
機械巨人を貫き破壊した。

クロノスLP 4000 1000

「ペペロンチーノ!？」

「さらに《ジャンク・アタック》の効果発動。装備モンスターが戦闘でモンスターを破壊した時、相手モンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える」

破壊された古代の機械巨人の破片が先生に降り注ぐ。なぜだろう、つい最近似たような光景を見たような気がする。

クロノスLP10000

「先生、ありがとうございました」

「ありえないノーネ!こんなことあるはずないノーネ!」

騒ぐ先生に一礼をし、フィールドを降りた。

ありえねえ!あいつ、トークン1体で勝ちやがった。
2人揃って1ターンキルだと。何なんだよあいつら。
フン、まぐれに決まっている。

周りの声を聞きながら十代達の所へ戻ると皆が迎えてくれた。

「やったな刹那!お前ならやれるって信じてたぜ!」

【まあ、当然だね】

【クリクリー】

【…………】(…あそこは違うだろ…)

「皆、ありがと。オドはいつまで落ち込んでるの。それじゃ私が最後みたいだし、帰ろうか」

さて、結果はどうなるかな？楽しみに待つとしよう。

刹那 side out

第三話 実技試験 VS 刹那（後書き）

《下剋上スライム》は500以上攻撃力を強化すると最強の攻撃力になるので便利でした。

なんでエクシースはレベルがないんだよお…

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

設定

遊城 刹那

性格：大人しめだが、十代の事になると熱くなる

好きな人、事、物：十代、ユベル、ハネクリボー、オド、鍛練、デユエル

嫌いな人、事、物：十代達を傷付ける人、十代をバカにする人、他人を見下す人

使用デッキ：元魔法使い族のトークンデッキ

備考：十代の双子の妹。十代とほぼ同じ外見。セミロング。普段はほぼ無表情で、十代とユベルとオドにしか読み取れない。十代がユベルのカードを持つまで、十代を泣かせた相手をリアルファイトで叩きのめしていた。幼少期はデユエルが弱く、十代に負けていたのが昏睡状態にはされなかったがユベルに目の敵にされていた。十代との和解のきっかけを作ったのでユベルとも和解し、親友となる。

オド

性格：負けず嫌いな性格

好きな人、事、物：明るい人、楽しいこと、ゲーム

嫌いな人、事、物：暗い人、つまらないこと

使用デッキ：ゴーレムデッキ

備考：マジカル・マリオネット魔法の操り人形の刹那の精霊。一言も喋らないが刹那達は理解できる。本体は後ろの操っている方。実体化はできないが魔力を使って物を動かすことができる。

遊城 十代

性格：基本的に遊戯王GX初期の十代の性格

好きな人、事、物：刹那、ユベル、ハネクリボー、オド、デュエル

嫌いな人、事、物：カードを大切にしない人、仲間を大切にしない人

使用デッキ：エレメンタルヒーローE・HEROデッキ

備考：デュエルは刹那にメタカードで鍛えられた。睡眠学習が可能で授業は理解できている。試験中もたいていは寝ているが時々刹那に脅されてきちんと受ける。

ユベル

性格：ヤンデレではない

好きな人、事、物：十代、刹那、ハネクリボー、オド、十代達とのデュエル

嫌いな人、事、物：十代を傷付ける人、十代をバカにする人、

使用デッキ：イービルヒーローE・HEROデッキ

備考：十代の精霊。モンスターを実体化することができる。自身を実体化させて十代や刹那とたまにデュエルしている。基本的には十代の言うことを聞く。たまに刹那の体を借りて行動する。

設定（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。

第四話 真夜中のデュエル VS 万丈目（前書き）

カード効果はOCGのものです。

第四話修正完了しました。

第四話 真夜中のデュエル VS 万丈目

刹那 side

私達は2人ともデュエルアカデミアに合格し、今は校長先生の話聞いています。少し離れた所に並んでいる赤い制服を着た十代は立っ
たまま寝ている。

所属は十代がオシリスレッドで私がオベリスクブルーだ。十代と同じクラスになりたかったが仕方がない。あ、終わったみたいだ。他の生徒の流れに乗って外に出て十代と合流すると、受験番号1番とメガネ君が先にいた。

「やあ、1番さん。その1番君にも言ったが俺は三沢大地。ライエローだ。よろしく」

「丸藤翔つす。オシリスレッドつす」

「遊城刹那。よろしく。十代は今から寮に行くんだよね。後で一緒に学園を見て回ろうよ」

「いいぜ。しかし刹那と俺の成績はそんなに変わらないのにクラスは違うんだな」

【：十代、女子は全員オベリスクブルーに入るって書いてたよ】

ユベルが額に手を当てつぶやく。ファイト、ユベル。

「まあね。それじゃ、また後で」

少しでも早く十代と行動するため、急いでオベリスクブルーの寮へと向かった。

* * *

「…どこの城だよ、ここは」

目の前にそびえ立つ寮を見て思わずつぶやいた。これを見て寮だと分かる人はいないだろう。

【……】（エリートと女子のための優遇と言ったところか…）

しばし呆然としていたがオドの言葉で我に返り、自分の部屋へと向かった。

* * *

荷物を整理し終え、十代と合流するために学園内を歩いている。

十代と待ち合わせはしていないが、双子のシンクロ率をなめるな。

「…右」

適当に進んでいくとデュエル場に出て、十代達を見つけた。何やらオベリスクブルーの男子と言い争っているらしい。

「十代、どういう状況？」

「刹那！いいところに来たな。俺とここでデュエルしようぜ」

「ここはオベリスクブルー専用のデュエルリングだと言っているだろ！オシリスレッドのドロップアウトは帰れ！」

「…なるほど、だいたい理解した」

ブルーの私が相手でもレッドの十代は使うなということか。しかし、このブルーの生徒は嫌いだな。他人を見下している感じで。何だかイライラしてきた。

「お前達、何を騒いでいる」

「ま、万丈目さん」

ブルーの生徒を睨みつけていると声がかかった。

「こいつらはまぐれとはいえクロノス先生に勝った連中じゃないか」

こいつ、十代のデュエルをまぐれと言ったな…。私の方は否定しないけど、許せないな。

「まぐれじゃないぜ。実力さ」

「その実力、見せてもらいたいものだな」

「いいぜ。デュエルだ！」

「あなた達、何をしているの！」

「て、天上院君」

十代達がデュエルディスクを構えると新たな声がかかった。

「そろそろ歓迎会が始まる時間よ」

「ちっ、行くぞお前達」

「「はい！」」

あいつは取り巻き共を引き連れて去って行った。

「あなた達、万丈目君の挑発に乗っちゃ駄目よ。あいつらろくでもない連中だから」

「分かった。忠告ありがとな」

「あなた達が遊城十代と遊城刹那ね。私は天上院明日香よ。明日香でいいわ」

「俺は十代でいいぜ」

「刹那でいいです」

「僕は丸藤翔つす」

「あなた達の寮でも歓迎会が始まるんじゃないかしら？」

「そうだったつす。アニキ、早く帰らないと始まっちゃっつす」

「そうだな。2人とも、また今度な」

十代達が帰っていった。もう少し一緒にいたかったのに…。

「私達も戻りましょう」

「…はい」

2人並んで歩いていると声をかけられた。

「それにしてもあなた、珍しいデッキを使うのね。トークンがエースのデッキなんて初めて見たわ」

「…エースはトークンじゃないです」

答えると少し驚かれた。まあ、オドは出なかったしね。

「そうなの。それと敬語はいいわよ。だけど、あんな勝ち方をしたからそう思ったわ」

「まあ、勝ち方の1つではあるけどね」

もっとも、他の勝ち方も似たようなものだけだ。

*

*

*

ブルーの歓迎会は一言でいうと豪勢だった。寮の外見から予想はしていたが、やっぱり落ち着かない。

歓迎会が終わり部屋に戻ると、オドが荷物からゲームを引っ張り出して始めた。

以前、何故そんなにゲームが好きなのか聞くと「自分は人形使いだから。人形キャラクターを操ることで誰にも負けるわけにはいかない」と答えになるような、ならないようなことを言われた。

…一度格闘ゲームでこてんぱんにされたことが悔しかったらしい。

「オド、ほどほどにするんだよ」

【……】（了解）

* * *

寝る準備をしているとPDAに十代からのメールが入った。

0時に昼間のデュエルリングであいつとデュエルするらしい。あいつは気に食わないけど、十代のデュエルは好きだから見に行こう。

十代は校則とか見てないだろうし、ガードマンの見張りもかねてね。

刹那 side out

十代 side

歓迎会が終わって部屋に戻るとPDAに万丈目からデュエルの呼び

出しのメールが入った。ベストカードを賭けたアンティルールだと断る理由なんかないし、あいつがどんなデュエルをするのか興味があるから行くぜ。
刹那は俺のデュエルを見るのが好きだから、黙ってたら後が怖い。すぐに刹那にメールを送ることにした。

「アニキ、僕も行っていいっすか？」

「いいぜ。行こう」

* * *

翔とデュエルリングに着くと万丈目達と刹那が先にいた。

「フン、逃げ出さなかったことだけは褒めてやる。アンティルールだ。負けた方がベストカードを渡してもらおう」

「十代、頑張つて」

「よっしゃー！行くぜ万丈目！」

「万丈目さんだ！」

「デュエル！」

十代LP4000

万丈目LP4000

「俺の先攻だ。ドロー！」

そういやこいつ、俺が先生に勝ったことを知っていたな。てことは俺が融合を使うことを使うことを知っているかもしれないな。対策はしておくか。

「俺は《E・HEROスパークマン》を召喚。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

スパークマン ATK1600

十代LP4000

手札：4枚

モンスター：スパークマン

魔法、罠：1枚

「俺のターンドロー。俺は「こんな時間に何をしているの！」て、天上院君」

万丈目がドローすると明日香が入ってきた。

「明日香、どうしてここにいるの？」

「あなたが寮を出るのを見かけたからよ」

「天上院君、今からこのレッドに学園の厳しさを教えてやるから、君はそこで見ていてたまえ。俺は《ヘルンジャー地獄戦士》を召喚。カードを3枚伏せてターンエンドだ」

地獄戦士 ATK1200

万丈目LP4000

手札：2枚

モンスター：地獄戦士

魔法、罨：3枚

「俺のターン、ドロ。俺は手札から《沼地の魔神王》を墓地へ捨て、デッキから《融合》を手札に加える。そして手札の《E・HEROフェザーマン》と《バーストレディ》を融合。来い！《フレイルム・ウィングマン》！」

フレイルム・ウィングマン ATK2100

「掛かったな！罨カード《ヘル・ポリマー》を発動！自分フィールド上のモンスター1体を墓地に送り、相手が召喚した融合モンスターのコントロールを得る。貴様の《フレイルム・ウィングマン》をもらうぞ」

《地獄戦士》がフィールドからいなくなり、《フレイルム・ウィングマン》が万丈目のフィールドに移る。
モンスター奪取のカードか、だが！

「まだまだ行くぜ！俺は手札から《ミラクル・フュージョン》を発動！墓地の《フェザーマン》と《バーストレディ》を除外し、現れる！《E・HEROノヴァマスター》！」

俺の場にフレイルム・ウィングマンとは別の、紅い鎧とマントを纏った炎のHEROが現れた。

ノヴァマスター ATK2600

「2度目の融合だと!？」

「《ノヴァマスター》で《フレイム・ウィングマン》を攻撃!」

万丈目LP4000 3500

「くっ、罨カード《ヘル・ブラスト》を発動!自分フィールド上の表側表示モンスターが破壊され墓地へ送られた時、攻撃力が1番低いモンスターを破壊し、お互いにその攻撃力の半分のダメージを受ける。《スパークマン》を破壊し、800ポイントのダメージだ!」

万丈目LP3500 2700

十代LP4000 3200

「《ノヴァマスター》の効果発動。戦闘でモンスターを破壊した時カードを1枚ドロウする。ターンエンドだ」

十代LP3200

手札:2枚

モンスター:ノヴァマスター

魔法、罨:1枚

「俺のターン、ドロウ!俺は罨カード《リビングデッドの呼び声》を発動。《地獄戦士》を特殊召喚する。そして手札から速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動!攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚した時、同じモンスターを手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。相手は自分フィールド上に存在するモンスターを1体選択し、特殊召喚する」

「ノヴァマスターは融合モンスターだから、デッキには存在しない」
「俺は《地獄戦士》を2体特殊召喚する。そして2体の《地獄戦士》を生け贄に、現れよ！《地獄の傀儡魔人》！」

地獄戦士 ATK1200

地獄の傀儡魔人 ATK2700

「《地獄の傀儡魔人》で《ノヴァマスター》を攻撃！」

「畏カード《異次元トンネル ミラーゲート》発動！《地獄の傀儡魔人》と《ノヴァマスター》を入れ替えてバトルし、エンドフェイズまでコントロールを得るぜ！」

「何だと！くっ」

万丈目LP2700 2600

「俺はターンエンドだ。だが《地獄の傀儡魔人》は俺のフィールドに戻る。貴様の場はがら空きだ！もう諦めた方がいいぞ」

万丈目LP2600

手札：1枚

モンスター：地獄戦士、地獄の傀儡魔人

魔法、罨：無し

「それはどうかな？俺のデッキには次のターンでお前を倒せるカードが眠っている。次のターン、そのカードを引いたら面白いと思わ

ないか？」

「馬鹿なことを言うな！そんな偶然あるわけないだろう！」

「俺はデッキを信じるぜ！俺のターン、ドロー！」

来た！

「ガードマンが来るわ！時間外の施設利用もアンティルールも校則違反よ！ばれたら退学になるかもしれないわ！」

へえ、そんな校則あったのか。ってか、何でこのタイミング？

「何だと！くそっ、デュエルはここまでだ。お前ら行くぞ！」

「はい！」

「あつ。おい待てよ、デュエルはまだ終わってないぞ！」

「アニキ、早く逃げるっす！」

「…やだ！俺はここを動かない！」

【わがまま言うんじゃないよ、十代！】

【クリー！】

「十代、…来い」

十代 side out

明日香 side

十代がわがままを言って一時はどうなるかと思ったけど、刹那の一言で大人しくなったから助かったわ。

「どうだったかしら、オベリスクブルーの洗礼は？」

「大したことなかった」

「惜しかったね、十代」

「？危なかったように見えたけど」

「最後に引いたカードは何だったんすか？アニキ」

「へへっ、これさー！」

そう言って十代は最後に引いたカード、《パラレル・ワールド・フュージョン平行世界融合》を見せた。また融合カード…一体何枚入れているのかしら？

「こいつで《フェザーマン》と《バーストレディ》を融合して、相手の全てのモンスターの攻撃力を半分にする《Great TOR NADO》を召喚。手札から《ザ・ヒート》を召喚して攻撃してたら俺の勝ちだ！」

まさかあのタイミングでキーカードを引くなんて、面白い子ね。

「じゃあ翔、戻るか。2人ともまた明日な」

「はいっす。おやすみっす」

「おやすみ、十代、翔」

「おやすみなさい」

十代達が帰っていった、私達も戻りましょう。

明日香 side out

第四話 真夜中のデュエル VS 万丈目（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。

第五話 偽ラブレター事件 昼（前書き）

ほぼ回想回。

第五話 偽ラブレター事件 昼

翔side

デュエルアカデミアの入学から少したって、今授業を受けているんですけど…

「シニョール翔、フィールド魔法について説明するノーネ」

「えっと、フィールド魔法は、その…」

「分からないならもういいノーネ。これだからオシリスレッドはドロップアウトなノーネ」

落ち着けばちゃんと言えるはずなのに、やっぱり僕はダメだなあ。隣にいるアニキは食い入るように教科書を覗き込んでるし、僕とアニキじゃ姿勢が違うんすね。

「それデ〜ハ、同じ質問を次はドロップアウトボーイが答えるノーネ」

あ、アニキが当てられたっす。クロノス先生はアニキのことをドロップアウトボーイって呼んでるっす。でも、アニキは教科書を覗き込んだまま微動だにしない。そんなに集中してるのかな？

「アニキ、当てられたっすよ？」

声をかけると、アニキが読んでいた教科書がゆっくりと倒れ、教室

に音が響いた。

そしてアニキは…寝ていた。
ブチッという音が聞こえたと思ったら

「ちゃんと授業を聞くノーネ！」

チヨークが飛んできた。

チヨークがアニキに当たるかと思ったら、どこからか消しゴムが飛んできてチヨークを撃ち落とした。

…つか、消しゴムってあんなに速く飛ぶものなんすか!?

あ、アニキが起きたみたいっす。

「ドロッパアウトボーイ、質問に答えるノーネ」

そんな、無理だよ。今まで寝ていたアニキが分かる訳ないじゃないか。

そう思っていたのにアニキはスラスラと流れるように答え、クロノス先生にストップをかけられるまで続いた。

…なんで質問が分かるんすか?

「あ、それと俺、オシリスレッドだけど試験で先生に勝っちゃったし?」

アニキの言葉にクロノス先生が悔しがり、笑いが起こる。

するとさっきと同じ方向から消しゴムがすごいスピードでアニキに向かって飛んできた。

アニキが前を向いたまま片手でそれをキャッチしたのは気のせいに

違くないっす！

翔side out

十代side

「刹那。なんで俺に消しゴム投げんだよ？」

「最後の一言は余計。言う必要はなかった」

皆と一緒に購買で買ったドローパンを食べている。俺はもちろん黄金の卵パンだ。入学してから当て続けているんだけど、この前オドに「お前はバグキャラか？」と言われた。言っではないが。

「でもアニキ寝てたんじゃないんすか？」

「ああ！でも授業は聞いているぜ」

「…器用なんすね」

「いろいろあつたんだよ…」

「十代、これは何？」

俺の目の前には採点済みのテストが置かれていて、テストには赤で丸が書かれている。

ただし、解答欄ではなく右上に。2つではなく1つだ。

「十代、努力してこの点なら勉強を教えようと思うけど、なんで解答した跡すらないの？」

「寝てた」

刹那の纏う空気が変わった。

「だってよく、放課後のデュエルを全力でしたいから、そのための睡眠だぜ？」

「初めから寝たの？」

「…今回は名前は書いたぜ」

「ユベルも起こさなかったの？」

【愚問だね、刹那。十代の寝顔を見るのは最高の生きがいじゃないか】

「それもそうだね」

昔はユベルが刹那を邪険に扱っていたのに、今じゃ本当に仲がいいよな。

「でもこのままじゃ十代が馬鹿にされるかもしれないし、来年デュエルアカデミアに入れないかもしれないよ」

「大丈夫！実技で勝つから！」

【問題は十代が馬鹿にされるかもしれないということだよ】

「そうだよ。馬鹿にした奴が出たら、締め上げなくちゃ」

…2人とも少し過保護な所があるんだよな。これでも昔より随分ましになったんだけど、似た者同士だなあ。それと刹那、締め上げるな。

まあ、今では2人とも実行には移さなくなったし、冗談だってわかるけどな。

「む、そうだ十代。十代にぴったりの勉強法、思いついた」

何かを考えていた刹那が声を上げた。

「十代が間違えた問題の数だけ、私のデッキに十代のデッキのメタカードを入れて休憩中にデュエルする。デュエルも強くなるし、一石二鳥だよ」

よかった。たくさん間違えたらデュエル禁止とかじゃなくて。

「ヴァニティ・デビル《虚無魔人》で《フォレストマン》を攻撃」

「《ヒーローバリア》を発動！」

融合ができない…

今の状況は刹那の場に特殊召喚を封じる《虚無魔人》、俺の場に《フォレストマン》がいる。

デュエルはまず俺の先攻で《フォレストマン》を召喚し、1枚伏せてターンエンド。刹那のターンで特殊召喚した《THEトリッキー》を生け贄に《虚無魔人》を召喚。攻撃された《フォレストマン》を守ったところだ。

早くあのモンスターを何とかしなくちゃ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

よし！

「《フォレストマン》の効果発動！デッキから《融合》を1枚手札に加える。そして魔法カード《月の書》を発動！《虚無魔人》に裏守備表示になってもらうぜ！手札の《レディ・オブ・ファイア》と場の《フォレストマン》を融合！来い《ノヴァマスター》！」

「畏カード《融合失敗》を発動。《ノヴァマスター》を融合デッキに戻してもらおうよ」

「な！？待った！！」

「やだ」

その後のデュエルも《ヘル・ポリマー》で融合モンスターを奪われ

たり、《融合禁止エリア》で融合を封じられたり、《成功率0%》で融合モンスターを墓地に送られたりした。何とか勝っていたが…

でもさすがにきついから授業は聞くことにした。寝ながらだけどな

そして、筆記試験前日…

「十代、明日は最後まで寝ないでよ」

「おう！大丈夫だって」

だけど刹那は考え込んでしまった。前の模試は半分で寝たけど、解いた所はほとんどあっていたじゃねーか。

「そうだ十代、おまじないをしよう」

「おまじない？」

すると刹那は「十代のため、十代のため」とつぶやきながらリングを持ってきた。

「十代、プロレスには《アイアンクロー》って言って、握力で頭部を締める技があるんだよ」

「？それがどうしたんだ？」

グシャッ

砕けた、リンゴが、片手で、刹那が、

「明日の試験、頑張ろう」

「あれはおまじないじゃねー!!」

「うわ!?いきなりどうしたんすか、アニキ」

「いや、悪い。何でもない」

「そっすか」

余計なことまで思い出しちゃった。まあ、たしかに試験中眠くなる
と砕け散るリンゴが脳裏に浮かんで眠気が飛んだけど、他に方法が
あっただろ。

「アニキ、次の授業が始まるっすよ」

「もうそんな時間か。行くっせ」

次は体育か。ちょうどいい、体を動かして気分を変えよう!

十代 side out

第五話 偽ライター事件 昼（後書き）

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1609y/>

遊戯王GX～象徴を操る者～

2011年11月20日18時28分発行